
紅目の魔法使い <ダーク七都 3・赤い眼のアヌヴィム>

絵理依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅目の魔法使い > ダーク七都3・赤い眼のアヌヴィム<

【Nコード】

N3712M

【作者名】

絵理依

【あらすじ】

七都が旅の途中で遭遇する、大切な出会い、四つのストーリー。その第1話です（完結済）。

赤い目と銀の髪を持つ、美しい魔法使いの話。

地の都に行く途中の宿で、七都はアヌヴィムの魔法使いに出会う。

七都をおちよくり、いやがらせをしてきた彼は、魔貴族の主人の屋敷から脱走してきたのだった。

七都は彼の過酷な過去と境遇に同情するが、彼には追っ手が迫っていた。

この小説は、他サイトでも公開しています。

第1章

また、感じる……。

七都は、立ち止まった。そして、ゆっくりと振り返る。

太陽は既に沈み、地上が闇に包まれてから、随分時間がたつ。
月が輝きを増し、そのねばつくような銀色の光の膜を、夜の景色の上にどっぴりと塗り重ねていた。

月の光が届かぬところは、真の闇。何か潜んでいたとしても、決してわからぬ妖しい暗黒の空間。

人口の光で、深夜でも快適に補足された七都の暮らす世界とは、全く異なっている。

とはいっても、魔神族の体を持つ七都の目には、闇も昼間の影のように薄く映り、景色も遠くまで、簡単に見渡すことができた。

誰もいない。

さっきまでの気配が、消えている。

歩くのをやめたので、素早く隠れたのか。

七都が歩いてきた道には、月の光が、濃く静かにわだかまっているだけだった。

ただ、風が木の葉をさらさらと、涼しげに揺らして行く。動くものといえば、それくらいしかなかった。

このあたりは、ますます魔の領域が近い。

昼間は行きかう旅人も多い道だが、闇が地上を覆い始めると、人の姿は消え失せる。

旅人たちはもちろん、魔神族を怖れているのだ。

彼らは、太陽が再び顔を出すまで、決して道に姿を現さない。

ふと、歩いているのが自分だけであることに気づくと、結構あせるものがあつた。

それでも七都は、構わずに歩き続けていた。

日が沈んでからのほうが快適で、歩く速さも当然増す。

本当のことを言うと、昼間は日陰で眠って、夜になってから、目いっぱい歩きたいくらいだ。

だが、そのへんで昼間から寝るわけにもいかない。

七都が道端で寝たりすると、もちろん、ものすごく目立ってしまうに違いないし、遭遇しなくてもよいトラブルや危険をわざわざ呼び寄せることになる。

闇が深くなると、七都は木や草の陰で横になり、少し眠った。

携帯しているカトウースを飲み、相変わらずどこから飛んできて髪にとまる蝶の群れから、エディシルをもらう。

朝になると、街道に姿を現した旅人たちに混じって、マントのフードを深く下ろし、今度は、のろのろと歩き始める。グリアモスの傷のせいですぐ疲れてしまうので、頻繁に休憩しながら。

そういう行動パターンを続けて、もう三日くらいになるだろうか。この調子では、七都の足で魔の領域に到着するには、セレウスが言ったよりも、もっと時間がかかるかもしれない。

けれども、昨日の晩からだ。

七都は、何者かの視線を感じるようになった。

誰かに見られている。

それも、あたたかく見守るような視線ではなく、鋭く突き刺すよ

うなものだ。

氷のように冷たく、明らかに敵意も混じっているような気がする。視線を感じて振り向いても、その視線の主は、むろん、見つけることはできない。

その感覚は、太陽が昇る少し前になると、突然消え失せた。気のせいかと思ってもいたのだが、日が沈んでしばらくすると、再び同じ感覚が戻ってきたのだ。

誰かにじっと見つめられている。氷のような視線で。

魔神族？

七都は、誰もいない道を眺めて、不安げに思う。

太陽をおもいつきり避けて、夜しか現れないなんて。

やっぱり、魔神族なのかもしれない。

なぜ姿を現さないで、自分をただ見ていただけなのかはわからないが。

もしかして、アヌヴィムの魔法使いだと思われているのかもしれない。額に銀の輪をしているのだから。

七都の額の輪に気づくと、さすがに人間たちは、近寄っては来なかった。

七都を見つけて、親しげに話しかけて来ようとした若い男性たちも、しばし押し黙り、結局立ち去ってしまう。

やはり、アヌヴィムの魔法使いは怖れているらしい。

アヌヴィムの主人は魔神族。背後には必ず魔神族が存在するのだ。だが、それが効くのは人間に対してだけ。

魔神族は、どういう反応を示すのだろうか？

ゼファイアは、魔神族の前では、この輪はしないほうがいいと言っていたが。

昨日は、もっと遠くから見つめられていたような感じがする。けれども、きょうは、さらに近くなった。

そう遠くないところから、じっと見られているのを感じる。気配も際立ってきた。

このまま野宿などしたら、襲ってくるかもしれない。グリアモスじゃないなんて、言い切れないのだから。

とにかく、人間の中に混じってしまったほうがいいかも。七都は、思う。

視線の主も、たくさんの人間と、明るい光に囲まれている七都には、接触しにくいに違いない。

ふと見渡すと、ちょうどそこに、こざっぱりした一軒の宿があった。

橙色のあたたかい光が、窓からこぼれるくらいに溢れている。旅人も、大勢泊まっていそうだ。

七都は迷うことなく、その扉を開けた。

途端に七都は、何層にもなった、賑やかな音に包まれる。

扉の正面にはカウンターがあり、宿屋の主人らしき中年の男性が座っていた。

カウンター以外の空間には、テーブルと椅子が雑多に並べられ、客たちが飲食をし、陽気に騒いでいる。

客たちの、大声で話す声、笑い声、酔っ払って叫ぶ声。食器の音。そして、そこに渦巻く、料理や酒の匂い。

それは、ほつと出来るものではあった。大勢の人々がそこにいるという証しなのだから。

けれども、七都は、気分が悪くなる。

魔神族の体は、人間の食べ物を、やはりどうしても受け付けない。こっぴどく閉ざされた空間にこもった食べ物の強い匂いも、どうやらだめらしい。

七都が姿を見せると、客たちは、さりげなく七都を観察した。

だが、額にはめているV字型の銀の輪の意味を理解すると、途端に視線をそらし、それまでの行動を何事もなかったかのように、続けるのだった。

「お泊りですか、アヌヴィムの魔法使いのお嬢さん」

宿の主人が、七都に話しかけた。

「あ、はい。部屋、空いてます?」

「もちろん、空いてますよ。前払いでお願いしますね」

主人が、七都を疑り深く、無遠慮に眺める。

後払いにして、何度も宿代を踏み倒された経験があるのかもしれない。

七都は上着のポケットから、小さな布袋を取り出した。中から金色の硬貨をつまみあげ、宿の主人に手渡す。

「足りませんか?」

主人は、その金貨を手のひらに乗せたまま、あんぐりと口を開け

た。

「足りるところか。十泊されたって、お釣りがたくさんいますよ」

「そうなんですか。一泊でいいんですけど」

「では、いちばんいい部屋を使っただけじゃなくてはいけませんね」

金貨が入った袋は、上着のポケットに、最初から入っていた。

町を出てしばらく歩いているうちに、七都はポケットにそれが入れられていることに気がついたのだ。

金貨は、全部で五枚、入っていた。

一枚でこういう宿に十泊以上できるなら、七都にとっては、結構な大金ということになる。

もちろんゼフィーアが、さりげなくポケットに忍ばせておいてくれたに違いなかった。

宿に泊まって、あたたかいベッドで眠ること。人間の食べ物も水も買う必要のない七都にとっては、それぐらいしかお金を使うことはない。

ゼフィーアは、そのことも見越していたのかもしれない。

夜になったら野宿なんかしないで、きちんとベッドでお眠りなさい。

彼女にそう言われているような気がした。

（ありがとう、ゼフィーア）

七都は、改めて彼女に感謝する。

今夜は宿に泊まるよ。お金は遠慮なく使わせてもらっね。

「お食事は？」

宿の主人が七都に訊ねた。

「いいません」

七都は答えたが、ふと考える。
食事をしなかったら、あやしまれるかな。

「えーと、その。ちょっと疲れすぎて、気分がすぐれないので」

その時、誰かが、七都の三つ編みをした髪を後ろから、ぐいと引っ張った。

「え？」

七都は振り向いたが、そこは壁だった。誰も立つてはいない。
だが、七都が動こうとすると、髪は再び引っ張られる。

宿の主人が、ひいいつと叫んだ。

七都の三つ編みの髪の先は、壁の中にめりこんでいた。
壁の表面から、髪が垂れ下がっているような状態になっている。

なに、これ……。

七都は、呆然と、自分の髪を見下ろす。
引っ張ってみたが、髪は壁から抜けなかった。
固く、壁の中にぬりこめられている。

魔法？

誰かが、魔法を使って、ちょっかいをかけている？

「だ、だいじょうぶ、お嬢ちゃん？」

宿の主人が、あせりまくって、七都に訊ねる。

「だいじょうぶじゃないですっ！」

七都は、叫んだ。そして、客たちをさっと見渡した。

この中に、いる。

魔法を使って、こんなくだらないいたずらをした、誰かが。

すぐに七都は、ホールの隅で、酒の入ったグラスを片手に持って、笑いをこらえている一人の若者を見つけ出した。

あいつだ。

魔法で七都の髪を壁に埋め込んだ、張本人。

七都は、その若者をキツと睨む。

歳は、二十歳過ぎくらい。

髪は漆黒で、背中までの長さがあった。

にやにやしながら七都を見つめるその目は、透明な琥珀色。

そして、その美形の若者の額には、七都と同じ、V字型の銀の輪がはめられている。

（アヌヴィムの魔法使い……！）

七都は眉を寄せて、彼を眺めた。

確かに人間は、七都の額の銀の輪を見ると、怖れて接触するのは控えてくれる。

けれども、相手がアヌヴィムの魔法使いだと、話は別かもしれないかった。

おそらく、若い女の子のアヌヴィムということで、完全に、甘く見られている。

この先、アヌヴィムの魔法使いに遭遇したら、こういうことは、割と起こってしまうことなのだろうか。

こんなの、当然、納得出来ない仕打ちだ。

七都の髪は、さらに、ずるずると壁に引き込まれた。

泣きそうになるくらい、情けなくなる。

七都は、唇を噛んだ。

理不尽だ。何であの人に、こんなことをされなければならない？
怒りが、じんわりとこみ上げてくる。

七都がその若者を睨むと、彼もその琥珀色の目で、七都をじっと見返してきた。

魔法をたつぷりとたたえたような、不思議な目。

外見よりも、年齢ははるかに上だろう。ゼフィーアよりも年上かもしれない。

当然魔法に関しても、七都より彼のほうが経験豊富だし、使い慣れている。

けれども、精神年齢は、ゼフィーアよりもはるかに下だ。

セレウスだつてももちろん、こんな、女の子に意地悪をして喜ぶようなことなんて、絶対にしない。

最低だ。

とにかく、あの魔法使いには、七都が魔神族であることを理解させて、やめてもらうしかない。

（今すぐ、髪を元に戻しなさい！）

七都は、心の中で、彼に言ってみた。伝わるかどうか、半信半疑だったが。

（ちょっとした挨拶だよ。そんなに怒ることもないんじゃない？）

彼の声が聞こえた。

正確には、声ではなく、彼の言いたい言葉が、直接頭に届いてきた。

彼は唇を一切動かしていないし、話すには、距離が離れすぎている。

（あなたには挨拶でも、わたしにはいやがらせにしか思えない）

（それは、まあ、人それぞれの見解だな）

（わたしは、いやがってるの。とにかくいやなの！ わかるでしょ。人が困っているのを見るのが、そんなに楽しい？）

（そんなに深刻に捉えなくても）

彼が、くすつと笑う。

（深刻だ！ 早く髪を戻しなさい！）

七都は、叫んだ。

（あなたも頭の固い女だな。微笑んで無視するとか、適当にあしらって済ませばいいだけのことなのでは？）

（わたしがそう出来るような物わかりのいいオトナになるまでには、たぶん、まだあと十年以上はかかる）

（では、十五年後くらいに、もう一度あなたに会ってみたいものだね）

彼がのんびりと言って、手に持っていたグラスに口をつける。

七都の髪は、さらに壁の中に消えた。

このままでは、壁に留めつけられてしまう。

（しつこい！ 人がいやがることをするな！ 第一、酔っ払いと遊んでるほど、わたしは暇じゃないんだ！ さっさと戻せ！！）

七都は、強い思念を彼にたたきつけた。

彼の口元から、笑いが消える。

怒ったか？

七都は、身構える。

七都の髪は、ぐいと強く引っ張られ、壁に引き込まれた。
顔がのけぞる。

やめる気はなさそうだ。

これって、宣戦布告？

七都はしばし目を閉じ、深く呼吸をする。

それから、ワインレッドの目を見開いた。

若者が手に持っていたグラスが、粉々になって、はじけ飛ぶ。グラスに入っていた酒もこぼれ散って、彼の顔と髪をぐっしょりと塗らした。

彼の琥珀色の目が、赤く燃えるような様相を帯びる。

彼は、手のひらに残ったグラスのかけらを握りつぶした。かけらは輝く透明な粉になり、テーブルの上に散らばった。

客たちが凍りつき、宿の主人が、おろおろと二人のアヌヴィムの魔法使いを見比べる。

ここで魔法を使った喧嘩はしないでくださいよお。主人の顔には、そういうセリフが張り付いていた。

いい加減に、わかりなさい。

あなたが相手にしているのは、アヌヴィムの魔法使いの女の子じゃない。

あなたの主人の同族だ。

そして、あなたが今やっていることは、わたしたちに対して、決して許されることではない。

七都は、静かに彼を見据える。威厳を保って、顔を真っ直ぐに上げて。

魔神族は、アヌヴィムよりも、立場は上。

それは、ゼフィーアが七都に何度も言って、わからせようとしたこと。

当然、この魔法使いも、そのことは承知しているだろう。知りすぎくらいに。

（魔神族か……？）

彼の言葉が、七都の頭の中で現れて、消えた。それには、驚きと戸惑い、そして、あきらめと絶望感のようなものも、付属品として確かにくっついていた。

七都の髪が、壁から、すうっと抜け出てくる。

よかった。やっとわかってくれた。大ごとにならずに済んだみたい。

七都は、取り戻した自分の髪が無傷であることを確認し、安堵する。

「ごめんなさい。ちょっとひやひやさせちゃったね」

七都は宿の主人にっこりと笑いかけ、それから部屋の鍵をもらって、階段を上がった。

ホールは、再びそれまでの喧騒を取り戻した。何事もなかったかのように。

アヌヴィムの魔法使いの若者は、思いつめたような目を宙にさまよわせ、注文した何杯目かの新しい酒を一気に飲み干した。

第2章

部屋に入るなり、七都はカトウースの容器を置き、メーベルルの剣とセージにもらった胸当てをはずして、ベッドに勢いよくダイブする。

ベッドは、七都の体を包み込み、しっかりと支えた。

もちろん、ゼフィアとセレウスの館のベッドほどふかふかでも、洗練されてもいなかったが、それなりに丈夫なベッドで、きちんと整えられ、清潔でもあった。

「あー、きょうは、屋根つきの建物のベッドの中で、気持ちよく眠れる……」

七都は呟いて、ベッドに寝転がる。

そして、ベッドからの低い目線で、部屋の中を見渡してみた。

そこは二つの狭い続き部屋になっていて、一応寝室とリビングに分かれていた。

家具は、ベッドと、テーブルに椅子二脚、そして備え付けの棚のみ。

この宿屋に見合った感じの、デザインよりも実用性にこだわった調度品だ。

いちばんいい部屋にしては粗末なものではあったが、一泊だけ過ぐすには、十分だった。

しばらく寝転がったあと、七都はおもむろに上半身を起こし、服の隙間から、そっと胸を覗いてみる。

相変わらずそこにあるのは、目をそむけたくなるような、恐ろし

い傷――。グリアモスの爪で引き裂かれた痕だった。

この傷をさらしてふらふら歩いたら、ゾンビにしか見えない。
七都は、自虐的に思う。

けれども、胸の傷は、少しずつではあるが、治ってきているような気がする。

暗黒が中に見えている傷口は、以前よりはふさがった。
気休めかもしれないが、確かに小さくなったような感じがする。

やっぱり、カトウースと蝶のエディシルのおかげだろう。

カトウースがお菓子でも、蝶には、ハンバーガーとか、たこ焼き程度の力はあるはず。

少しずつでも、傷口がふさがっていつてくれれば……。

もしこの状態のまま、元の世界にもどったら、どうなるんだろう。
七都は、ふと考えてみる。

やっぱり向こうでも怪我がそのままだろうから、たぶん救急車で運ばれて、病院直行……だよな。

で、もちろん、長期入院。夏休みどころか、二学期になっても、
余裕で、まったりどっぷり病室の中。

果林さんにも、心配と迷惑をかけてしまう。料理の学校に行くどころじゃなくなるに違いないもの。

その前に、果林さん、傷を見た途端、気を失うかも。
となると、帰るまでには、絶対にこっちで治さなきゃ。

風の城には、魔神族のお医者さんっているのかな。

ナチグロ＝ロビンも、もうそこでは意地悪はしないよね。

ちゃんと手当てしてくれると信じよう。
彼が出来なくても、リュシフィンなら、出来るだろうし……。

ユードが言ったように、傷口を跡形もなく、きれいに治そうとするなら、魔王がグリアモスのエディシルがいるのかもしれない。
だとしたら、リュシフィンは魔王、ナチグロ「ロビン」はグリアモス。二人とも揃っている。

だが、彼らがエディシルを快くくれるとしたところで、自分は何の抵抗もなく、素直にもらう気になれるのだろうか。

窓の外で、微かな、ぱたぱたという音が聞こえる。
ガラスの向こうで、蝶の集団が舞っていた。
蝶たちは、透明な羽根でガラスをたたいている。

「晩ご飯！」

七都はベッドから起き上がって、窓を開けた。
蝶たちが、七都の髪に、次々と止まる。
窓の向こうには、広めのバルコニーがあった。
七都は蝶を引き連れてバルコニーに移動し、手すりにもたれかかる。

宿の一階のホールのあたりからは、まだ部分的に人々の賑やかな声が漏れてはいたが、地上は静寂に包まれていた。
月の光が夜の景色を、青味を帯びた銀色に染めている。
そのどこからも、あの冷たい謎の視線は、感じられなかった。気配も全くない。

七都は、ほっと胸を撫で下ろす。
やはり、人間のいるところには近づいて来ない。

とはいえ、視線の主が魔神族なら、いずれは七都の前に姿を現すに違いなかった。

もうすぐ、魔の領域。

人間に対する遠慮も一切いらないし、夜でなくとも活動できる。そこに入ってしまったえば、視線の主とは対峙せざるを得なくなるのだ。

当然相手は、七都よりも魔の領域に詳しいだろう。魔力も使えるだろうし。

もし戦いを挑まれてもしたら、圧倒的に不利かもしれない。

それにしても、いったい、何者なのだろう。

静かで冷たい、絡みつくような視線。

憤ったような、けれども、少しだけ悲しみが混じったような……。ともかくその視線には、七都に対する敵意は確かにあるようだった。

何となく、とても嫌われているような気がする。

町を出てから、七都の感覚は、次第に鋭くなった。

というより、この世界に来てから、徐々に鋭くなりつつあるのかもしれない。

魔力も少しずつ、思い通りに使えるようになってきた。

ティエラが隠していた剣も、簡単に見抜けた。謎の視線の存在もわかったし、先ほども、あの魔法使いのグラスを粉々にした。中身を彼の顔と髪にかかるようにぶちまけることにも、ほぼ成功。

魔力は、どうやら、気負って使おうとすると、だめみたいだった。無意識に、自然に使うと、驚くほどうまくいく。

難しいことを考えないで、リラックスして直感で使うのだ。手や足を動かすように。目で物を見るように。そう、ナイジェル

が言ったように。

七都が指を立てると、蝶が一匹、髪から離れて、その先にとまった。

「いただきます」

蝶が、七都の指の先で分解する。
銀の粉が飛び散った。

「う……。気持ち悪い」

七都は、顔をしかめた。

何十回蝶を食べても、慣れない。
体の中に流れ込んでくるエディシルは確かに美味だが、蝶が消える感覚は、やはりぞっとするものだった。

何せ、生きたままその生命を絶って、自分の糧にするのだ。

蝶の踊り食い……。

七都は、ため息をつく。

カトウースは、もうほとんど残ってはいなかった。
あと数回飲むと、なくなってしまう。
となると、頼れるのは、この蝶だけになる。

ごめんね。わたしが生きるために。
ありがとう。いただきます。

二匹目の蝶は、七都の唇に触れて、はじけ散った。
抑えないと、吐き気がしそうだ。

だが、心地のよいあたたかい流れが体の中に入り込み、疲れを癒して行く。

「やはりあなたは、魔神族ですね」

誰かが七都の右斜め後方で、呟いた。

七都は、思わず振り返る。

蝶たちが、七都の心の動きに敏感に反応し、それをあからさまに表現するかのようになり、一斉に宙を舞った。

あの魔法使いが、そこに立っていた。

七都の髪を壁の中に埋め込み、七都にグラスを割られた、アヌヴィムの魔法使い。

彼は、琥珀色の透き通った不思議な目で、七都を見つめている。

「勝手に入って来ないでくれる？　ここは外だけど、この空間は、一応わたしの部屋の一部なんだからね」

七都は、彼を睨んだ。

「まだ怒っておられます？」

「当たり前でしょ。言っとくけど、あなたの第一印象は、ものすごく悪いから」

魔法使いは微笑んで、その場にひざまずいた。
そして頭を丁寧になげ、手を胸の前で折り曲げる。

とてもきれいで優雅な仕草だった。
今までそのような挨拶を七都に行なった、誰よりも。

そのポーズも、絵から抜け出てきたかのように、きちんと決まっている。

それはもちろん、彼が美しい若者であることも、その優雅さを増幅させる一因に違いなかった。

彼は、セレウスやユード以上に端正な顔立ちをしているし、物腰もどこか洗練されていた。

そしてこの人は、こういう動作することに、非常に慣れている。
七都は、直感的に思った。

おそらく、何千、いや何万にもなるかもしれない回数を、魔神族の主人の前で、日常的に行ってきたのだろう。

「先ほどのことは、お許してください。決して悪気があったわけでは
ありません」

彼が頭を下げたまま、言った。

「女の子をいじめちゃだめですよ。女の子には親切にしなきゃ、嫌
われるよ」

「かわいい女の子がいたら、ちょっかいを出してみたくなるのが、
男の性というものですよ」

彼は微かに笑って、七都をちらっと見上げた。

「そういうことを自分のあきれた行動の、都合のいい言い訳にしな

いでほしいな。男の人にとっては軽い冗談でも、女の子にとっては悔しいし、悲しいし、横暴なことにしか思えない」

「しかし、あなたの行動も、感心できるようなものではありませんよ」

うう。この人、やんわりと反論してくる。

七都は、さらに彼を睨む。

けれども、魔法使いは続けて言った。

「ああいったことでいちいち憤慨して反応していたら、きりがありません。第一、相手を怒らせたら、やっかいなことになりますよ」

「やっかいなことって？」

「巻き込まれなくてもいい災厄に、自分から飛び込むようなものです。確かにあなたは、強力な魔力をお持ちのようですが、まだ使いこなせてはいない。今まともに私と戦ったら、とても勝ち目はありませんね。私は簡単にあなたを組み伏せられる」

「それ、わたしを脅してるの？」

「脅しているのではなく、忠告してさしあげているのです」

彼が言った。

七都は、眉を寄せる。

忠告か。

ゼファイアにしろ、セレウスにしろ、この人にしろ。

アヌヴィムの魔法使いというのは、忠告が趣味か？

「多少腹が立つても、ご自分を抑えて、取るに足りぬ無価値な接触は無視するか、軽くあしらって通り過ぎなくては。それもまた、賢く生きる術ですよ。関わり合いになると、ろくなことになりません」

「つまり、我慢しろと？ 悔しくても、情けなくても。何でこっちが我慢させられなきゃならないの。そもそも、ちよっかいをかけてくるあなたがいけないわけでしょうが。無視したり、軽くあしらってくれることを前提にちよっかいをかけるなんて、完全に相手に甘えてるよ」

「手厳しいですね」

魔法使いは、にやつと笑った。

「だが、理不尽なこともそれなりに受け入れていかなければなりませんよ。危険を回避して、穏やかに生きていくためにはね」

「いやなことはいやだって、はっきり言わないと相手にわからないし、わからないままだと相手が図に乗る。あなただって、誰かに理不尽なことや、いやなことをされたら、文句言うでしょ？」

「私の場合は、文句を言ったって、どうにもならないですよ。最初から無駄なこと。だから、今、この宿にいて、ホールの隅で、決して醉えない酒なんぞかつくらっているわけだが」

「お酒に酔えないの」

「アヌヴィムは、どれだけ酒を飲んでも、酔うことはない。おそら

く、魔神族に提供するエディシルがまずくなるのを防ぐためなのでしょう。ご存知ではなかったのかな？　魔神族のお嬢さま」

「知らない。じゃあ、酔っ払って、わたしをおちよくったわけでもないんだ」

「だから、あなたに酔っ払いなんて言われたのは、心外でしたね」

彼は、ふっとため息をつく。

「それにしても、あなたが魔神族だと見抜けなかったのは、情けない限りです。私ともあろうものが……」

「でも、あなたを騙せたつてことは、一応わたしは、アヌヴィムの魔法使いにうまく化けられてるってことだよね」

「そうですね。ただ、アヌヴィムの魔法使いにその蝶が止まることはありませんし、蝶を食べることもありません」

魔法使いは、蝶をリボンのように髪にたくさんとめている七都を、改めて見上げた。

「その蝶は、前菜ですか？　それとも、食後のデザート？　この宿には、あまりよいエディシルを持った人間は泊まっていないですよ。それこそ、酔っ払いだらけだ」

「関係ないよ。人間のエディシルは食べないことにしてるから」

「ほう。それはまた、なぜ？」

魔法使いが驚いたように、だが、少し興味を引かれたような面持

ちで訊ねた。

「要するに、いやだから！」

七都は、投げやりに答える。

「では、あなたのお食事は、その蝶だけですか？」

「あとは、カトウースのお茶。でも、もう飲んじゃって、ほとんど残ってないから、もうすぐこの蝶だけになっちゃうけどね」

「カトウースは、魔の領域の中なら、あらゆるところに咲いてますよ。これから行かれるのでしょうか？　しかし、カトウースと蝶だけの食事内容なんて、賛成は出来ませんね」

「ほっといて。あなたはどこから来たの？　魔の領域？」

「そうです。光の都から」

「じゃあ、あなたのご主人は、光の魔神族？」

「そういうことです。……ああ」

魔法使いが、琥珀色の目を伏せて、うめき声をあげる。
それから彼は、力なく立ち上がった。

「その主人が来たようですね」

「え？」

第3章

何かが地を駆けるカッカッという音と、ウィーンという機械の音が、絡まり合って聞こえた。

あの音は……。

七都は、バルコニーから下の景色を眺める。

月の光をきらきら反射させながら、何か白い物体が三つ、道の向こうから、滑るように走ってくるのが見えた。

「……機械の馬？」

メーベルルが乗って来て、そしてナイジェルが乗って行った、あの機械の馬と同じ音が近づいてくる。

「私の追っ手です」

魔法使いが呟いた。

「追っ手？ …… ってことは、あなたは逃げてきたの？ ご主人のところから？」

「そうです。理不尽なことに文句が言えない立場なもので、逃げるという行動に移したわけです」

「だけど、そういうこと、してはいけないんじゃない？」

「まあ、そうですね。アヌヴィムにとっては、一番許されないことです。主人に対する裏切り行為ですから。では、私は、これにて捕まるわけにはいきませんので」

彼は、七都に軽く頭を下げた。

七都は、思わず彼に訊ねる。

「逃げられる？」

「さあ……。もうあんなところに来てますからね。近すぎます」

魔法使いは、他人事のように言った。

「でも、あきらめずに逃げなくてはね」

追っ手は、もうはつきりとその姿を現していた。

メーベルルの馬は黒かったが、その三頭の馬は、真珠色がかかった銀色だった。

それぞれ、馬上に人影も見える。おそらく、魔神族が三人――。瞬く間に、近づいてくる。

「隠れて！」

七都は、自分の部屋を指差した。

「私の第一印象は、すこぶる悪かったのでは？」

魔法使いが、意外そうに言う。

「そんな場合じゃないでしょう。困っている人がいれば、助けなければね」

七都が怒ったように言うと、魔法使いは一礼して、部屋の中に消えた。

そのすぐあとに、機械の馬が、七都の立っているバルコニーの下を通り過ぎる。

先頭の馬には、白いマントに、輝く赤銅色の長い髪をなびかせた人物。顔には、猫の仮面を被っている。

メーベルルの仮面とは、違ったデザインのものだった。笑っているのではなく、目を開いた、睨みつけるような猫の顔。

残りの二頭には、全く同じ格好をした人物が跨っていた。

尖った耳を頭の上に立てた兜をすっぽりと被り、黒いマントで体を覆っている。その兜もまた、猫を模しているようだ。

七都の視線に気がついたのか、先頭の人物が、七都のほうに顔を向けた。

仮面の下、紫色がかった青い目が、七都の姿を捉える。

七都とその人物は、しばし見詰め合った。

それは一瞬だったが、とても長い時間のように思えた。

機械の馬は、いきなり走るのをやめた。

急ブレーキだ。

だが、馬上の三人は動じることなく、きびすを返す。

すぐに一行は、七都のいるバルコニーの下まで駆けてきた。

機械の馬は一斉に静かになり、先頭の人物が進み出て、七都を見

上げる。

猫の仮面がはずされ、白い顔が現れた。
ネイビーブルーの目。薄紅色の唇。赤銅の髪がきらめく。
本当の年齢はわからないが、見た目は、二十代半ば。
美しい魔神族の青年だった。

七都は、バルコニーの木製の手すりをぎゅっと握りしめる。

怖気づかない。
こわがらない。

七都は、心の中で、自分に言い聞かせるように呟いた。

わたしの同族だ。緊張する必要もない。
リラックスして、話そう。

「アヌヴィムのふりをして、ご旅行ですか？」

彼が言った。

どうやら、七都が魔神族だということは、わかったようだ。

アヌヴィムの魔法使いの印である銀の輪に惑わされることもなく、
七都の正体を見破った。

もっとも、あの魔法使いが言ったように、蝶を髪にとめているので、そうわかったのかもしれない。その前に、同族の気配みたいなものを感じたのかもしれない。

「この輪は、身を守るためです」

七都は、答える。

「おひとりか？」

彼の質問に、七都は頷いた。

「私の名は、ジュネス。光の魔神族。あなたはどちらの？」

「わたしは、風の魔神族。名前は、ナナト」

「風の……？」

ジュネスは、驚いたように呟く。

「風の魔神族の方にお会いするのは、初めてですね。もうほとんど残っていないと聞くが」

「なぜほとんど残っていないのか、ご存知ですか？」

「随分昔のことですが、何か事故が起こって、風の都は壊滅状態になったとか」

「壊滅？ なぜ……」

「わかりません。我々には、隠されていることです。魔王さま方のみがご存知でしょう」

「水の魔王さまは、知らないみたいだったけど……」

「シルヴェリスさまは、外の世界から来られた方。それに、最近即位されたばかりでもあられ、そのことはご存知ないでしょう。昔からの魔王さまだけがご存知のこと」

ジュネスは、紫がかった青い目で七都をじっと見つめる。

「しかしながら、シルヴェリスさまとご懇意にされているとは、あなたはただ者ではないようですね。これから、風の都へ？」

「ええ」

七都は、短く返事する。

「ところで、このへんで、アヌヴィムの魔法使いを見かけませんでしたか？ あなたと同じ銀の輪を額にはめている。名前は、シャルデイン。黒髪に、赤味がかった黄色の目をしているのですが」

「この宿のホールで、わたしにいたずらを仕掛けてきたアヌヴィムの魔法使いがいました。確か、そのような風貌でしたよ。でも、随分前に出て行ったようです」

「そうですか。もしその魔法使いが私のアヌヴィムならば、お許しを。では、もう少し先を探してみます」

「お氣をつけて、ジュネス」

「ありがとう。あなたもお氣をつけて。けれど、ナナト。あなたのエディシルの弱さは、尋常ではないですね。魔力は強いものを感じますが。いったいこれは……」

ジュネスは、探るように七都を見上げる。

七都は、思わず胸に手を当てた。

「病気か？ いや、怪我をされているのかな。だいじょうぶですか？」

「だいじょうぶです。ありがとうございます」

「では、失礼を」

ジュネスは、猫の仮面を被った。

魔神族を乗せた三頭の機械の馬は、再び隊列を組んで、駆けて行く。

その姿は、瞬くうちに消えてしまった。

あのお供の二人は、下級魔神族。グリアモスだ。

七都は、思った。

兜の中で輝いていたのは、油断のならない、透き通った金色の目。あの魔法使いが追っ手から逃れるためには、相当苦労することになるかもしれない。

七都は、部屋に戻った。

部屋の中に、あの魔法使いの気配は、一切感じられない。うまく隠れているようだ。

（でもね……）

七都は、真っ直ぐベッドに向かい、その下を覗き込む。魔法使いが仰向けになって、横たわっていた。

「安易というか、安直というか。子供がかくれんぼするときだって、もっとましなところに隠れるよ」

七都は、彼に声をかける。

「ましなところとは？」

「天井裏に隠れるとか。魔法を使って、壁と同化するとか」

「魔法なんか使用したら、ここにいますと宣言しているようなものですよ」

魔法使いは、琥珀色の目で七都を見上げた。

そして、手を伸ばして、七都の手首をつかむ。

セレウスと同じ体温。

一瞬めまいがしたが、七都は自分を立て直す。

「怪我をしているのに、蝶とカトウースが食事ですか。エディシルが弱いのも当たり前だ」

「はなしてよ」

七都は、彼を睨んだ。

「グリアモスですね、あなたに傷を負わせたのは……」

「あなたの追っ手の中にも、グリアモスが二匹、いたよ」

魔法使いは、深いため息をついた。そして七都から手を離し、ベツドの下からずりりと抜け出る。

彼は立ち上がり、窓の外をじっと眺めた。

「お暇な方だ。自ら私を捜しに出て来られるなどと」
彼が呟いた。

「何でジュネスから逃げたの、シャルディン」

「行きたいところがあるからです」

その魔法使い——シャルディンが答える。

「行きたいところ？ そんなに大切なところ？」

「私の家族のところへ……」

シャルディンが、寂しそうに微笑む。

「あなたの家族……」

「私は子供の頃、魔神族にさらわれたのです。それ以来、家族に会っていません」

「そうなの……」

この人は、魔神族に、とてもひどいことをされたんだ。

七都は、穏やかな表情で七都を見下ろす魔法使いを、複雑な気持ちで眺めた。

「五十年以上も前のことですからね。家族も、元気でいるかどうか。もう誰も残っていないかもしれない。私にとって、今が最後の機会なのです。今帰れば、運がよければ家族の誰かに会えるでしょう。でも、この時期を逃したら、残っていた家族も年老いて死んでしまう。私の家族は、普通の人間ですからね。私のように長生きは出来ない。もっと後で帰ったら、おそらく私を待っていてくれる人は、誰もいないでしょう。私は、たくさん並んだ私の家族の墓の前に、ただ佇んで泣くことしか出来ない」

「きっと、会えるよ、シャルディン。家族はいつばいいいの？」

「父と母と、兄と妹」

「じゃあ、必ず誰かに会えるね。全員、元気かもしれないし」

シャルディンは、笑って七都を抱きしめた。

「あのお。気安く触らないでほしいんですけど」

七都は口を尖らせ、小さく呟く。

同じアヌヴィムの魔法使いでも、ゼフィーアとは、なんかものすごく態度が違う。

アヌヴィムって、受身じゃなかったの？

「ありがとう、ナナトさま。感謝します。私をかくまってくれて。あなたにはひどいことをしたのに」

「でも、魔神族もあなたに、ああいういたずらとは比べものになら

ないくらいの、ひどいことをした。わたしの同族だ」

「あなたが罪悪感を持つ必要はありませんよ」

シャルディンは、やさしい目で七都を見下ろした。

近い……。

七都は、シャルディンの腕をやりわりとはずし、彼からゆっくりと離れる。

まったく。

わたしが自分を失って暴走して、おまけに魔力を使ってあなたを襲ったら、いくら魔法使いのあなただつて、きっと抗えないよ。

「風の魔神族には、私は会ったことがありますよ」

シャルディンが言った。

「えっ……」

「会ったというより、見かけたといったほうが正確かもしれません」

「いつ……どこで？」

「一昨日だったかな。ここよりもっと東にある店でした。私は例のごとく、飲めない酒をくらっていたが、少し離れたテーブルに、彼が」

「彼？ 男の人？」

シャルディンは、頷いた。

「外見の年齢は、ジュネスさくらいですね。他の客が、彼のことについて、ひそひそ小声で話していました。だから、彼のことを知ったわけですが……」

「あまりいい話じゃないわけだ」

「彼は、魔神族だということを公にしている。そして、魔神狩人をしてるらしいです」

「魔神狩人！？」

七都は、頭を殴られたような気がした。

魔神狩人って？

風の魔神族が？

ユードやカディナのように、エヴァンレットの剣を手にして、魔神族を狩っているってこと？

なぜ……。

「じゃあ、もしわたしがその人に出会ったら、わたし、その人に狩られちゃうのかな」

「貴重な同族を殺すような真似はしなと思いますけどね。もし運よく出会えたら、事情を聞いてみられては……」

「うん。もちろんそうするけど……。名前とか、知ってる？」

「彼の名前は、カーラジルト」

「カーラジルト。覚えておく。絶対、忘れない」

七都は、その名前を何度も繰り返して発音してみた。

「魔神狩人の間では、『化け猫カーラジルト』などと呼ばれているようです」

「化け猫？　なんで……？」

「猫のように、口が耳まで裂けているとか」

シャルディンは、両手で唇から耳まで、なぞって見せる。

「で、裂けてたの？　あなたは彼を見たのでしょうか？」

「そんな様子はなかったです。私が見た限りではね。いい男でしたよ。ジュネスさまと同じくらい、いい男かもしれません」

「じゃあ、相当の美青年ってことか」

「会ったのが楽しみですな」

シャルディンが、にまつと笑う。

「でも、いきなりエヴァンレットの剣で襲ってこられたら、たまったもんじゃないな」

「だいじょうぶですって。物分りのよさそうな、穏やかな物腰の男でしたから」

「うん……。だいいけどね」

「では、ナナトさま。私は、これで」

シャルディンは、胸に手を置く。

「これから行くの？ 家族に会いに」

「夜のうちは、まだ危ないですからね。外には出ません。この宿で一晩過ごして、夜明け近くになったら、出発します。今夜は、あなたのおかげで、ゆっくり寝られそうだ。追っ手はもう、ここには来ないでしょうから」

「そうだね。安心して、ゆっくり眠ったらいい」

「本当なら、私のエディシルをあなたに差し上げたいところなのですが、私もまだ、これから力がいるので。申し訳ありませんが」

「エディシルは、いらない。その気持ちだけで十分です。おやすみ、シャルディン」

「おやすみなさい、ナナトさま」

シャルディンは丁寧に頭を下げ、優雅な身のこなしで、ドアから出て行った。

第4章

少女がひとり、目の前にいた。

やわらかい金色の長い髪をおさげにしている。

髪の間からこぼれるうなじが、不安になるくらい、か細い。

後ろ姿が小さくて、華奢で、かわいらしかった。

彼がおさげを引っ張ると、少女は怒った顔をして、振り返る。
薄い空色の目が、彼を睨みつけた。

「母さまあ！ また、シャルディンがいじめるっ！！」

少女が叫んだ。

違うよ。

かわいいからだよ。

きみの怒った顔もかわいいから、見たいんだよ。
だから、ちょっとだけ、さわってみたくなる。

「おまえなあ。女の子をいじめたら、もてないぞ」

彼の兄が、あきれたように言う。

兄は、彼よりも五つ年上。妹のリュディは、三つ年下だった。

「そういうあなたも、シャルディンくらいの歳には、女の子を泣かせてたわよ」

彼の母が微笑んだ。

いつも微笑みを絶やさないと、やさしい母。リュディと同じ、金色の髪。

「私も、子供の頃には、女の子をいじめて嫌われていた。家系だな」
父も笑う。

「ま、最終的には、母さんみたいな美人と結婚できたわけだから、悲観することはないぞ」

母は、ほんと、軽く父の腕をたたいた。

「シャルディン。もう当然、口きいてあげないから」

リュディが、むくれる。

困ったな。どうすれば、機嫌を直してくれるの？

「じゃあ、ピアノの花を摘んできて」

リュディが言った。

わかった。摘んでくる。

「シャルディン。もうすぐ日が暮れる。外に出ないで」

母が心配そうに言った。

「あなたは、それでなくても目立つんだから。もし、魔神族にでも目をつけられたら……」

だいじょうぶだよ。

今の季節は、日が長い。

暗くなるまで、まだだいぶある。

リュデイ、いっぱい摘んでくるよ。

白い花が、丘に一面に咲いている。

緑地に花模様の絨毯を敷き詰めたように。

結婚式に使われる、可憐な花、ピアナ。

少女たちが一番好きな、縁起のいい花だった。

花束にすると、それほど甘くはない、すっきりした香りがするのだが、ここではあまりにも数多く、濃く漂っているので、むせそうになる。

彼は、その花を摘み始める。

抱えきれないくらいにピアナの花を摘んだ頃。

ふと気がつくと、太陽は、ほとんど沈んでいた。

太陽の最後のかげらが、山の向こうに隠れていくところだった。

彼は、言い知れぬ不安を感じる。

だが、まだあたりは明るい。

当分、この明るさは続く。

だいじょうぶ。帰ろう。急いで。

そのとき、背後に誰かの気配がした。

人間ではない。

それは、一目見るなり、彼にもわかった。

「あ……」

彼は、うめく。
体が固まって動かなかった。

「珍しい髪と目の色の子供だな」

目の前に立った人物が、彼を見下ろして、言った。
黄色の目。瞳が針のようだ。

その人物の背後にも、同じ目をした男たちが複数、控えている。

「連れて行こう。私のアヌヴィムにする」

摘んだピアナの花が、地面に散らばった。

彼は、それを拾えなかった。

手を伸ばしたが、花は彼の手から、どんどん遠ざかって行く。

ああ。

帰れない。帰れないよ。

父さま、母さま、兄さま、リュディ……。

目の前が暗くなる。

遠く、微かな音しか聞こえなくなる。

「シャルディン？ どこに行ったの？」

「シャルディン……！」

家族が彼を捜している。

父さま、母さま。ぼくはここにいるんだ。
真っ暗だけど、声は聞こえてる。

助けて……。

「シャルディン……！」

「シャルディン！ 兄さま！ もうピアノの花なんかいらないから、
お願い、早く出てきて……！」

兄の声が震えている。
リュディが泣いていた。

家族の悲痛な声が、次第に消えて行く。

帰らなくては。

帰ろう、みんなのところへ。

帰るんだ……。

だが、彼の周囲には、果てしない闇と、
気の遠くなるような静寂しかなかった。

シャルディンは、目を開けた。

また、いつもの夢……。あの時の。
数え切れないくらい、何度も見た夢だ。

帰れなかった家。果たせなかった約束……。

それを抱えたまま、長い長い時を過ごしてきた。魔の領域の中で。

シャルディンは、起き上がった。

窓の外は、闇が薄くなっている。

もうすぐ、夜が明ける。

気の早い鳥の声も聞こえてくる。

そろそろ、行かなければ。

あの時の続きを始めなければならない。

帰るのだ、家族のところに。そして、約束を果たそう。

両親は、もうこの世にはいないかもしれない。

兄とリュディは、元気でいるだろうか。

リュディは、少女の時期を過ぎ、娘となり、花嫁となり、子供を

もうけ、もう既に孫もいるかもしれない。

そういう年齢になっているはずだ。

まだ間に合うのだろうか。

もし間に合ったら、ピアノの花をあの時よりもたくさん摘んで、

リュディに渡そう。

部屋の闇が、ぞろりと動いた。

シャルディンは、はっとして振り返る。

闇の中に、燃えるような血の色の目が四つ、光っていた。

（グリアモス！！）

闇の中から、二匹の巨大な真っ黒い猫が飛び出て、シャルディンに襲いかかる。

逃げる間も、魔法を使う間もなかった。

シャルディンは、グリアモスの前足で、ベッドに押さえつけられる。

「やあ、シャルディン」

グリアモスの後ろから、彼の主人、ジュネスが現れた。

ジュネスは眉を寄せ、自分のアヌヴィムを紫がかった青い目で見下ろした。

「今回も、見つかってしまいましたね……」

シャルディンは、あきらめたように呟いた。

「そなたが私のところから逃げ出すのは、これで何度目になるんだろうね」

「四度目くらいですかね……」

シャルディンは、答えた。

「そんなに私がいやか？」

ジュネスが真面目な表情をして、訊ねる。

「あなたを嫌っているとか、そういうことはありません。あなたは、私が仕えた多くの魔神族の中では、いちばんましな扱いを下さったと思います。あなたを尊敬し、感謝もしています。けれども私は、行かねばならぬのです」

「前にそなたが逃げたとき、言ったはずだね。今度逃げたら、最後だと。わかっているね」

ジュネスは、シャルデインのそばにかがみこんだ。

「わかっていますよ……」

シャルデインは、呟いた。

「もう、四度目ともなると、そなたを庇うことも出来ぬ。他のアヌヴィムたちに示しが見つからないのだよ。そなたに与えた魔法の能力は、返してもらふ。悪く思うな」

「思いません。あなたのお立場も、理解できますから」

「美しいシャルデイン。そなたの醜い姿は見たくはなかったが、仕方がない。実に残念だ。私の最後の口づけを受け取るがいい」

ジュネスは、シャルデインの唇に、自らの唇を重ねた。

ピアノの花の懐かしい香りが、どこからか、ふわっと漂って、シャルデインの意識は遠くなった。

第5章

七都は、浅い眠りから覚めた。
目を開いて、天井を見つめる。

何かを感じた。

光のような、熱のようなもの。

七都の感覚をかすかに刺激して、消え去った。

誰かが近くで、魔力を使った……？

シャルデイン？

ジュネス？

テーブルの上で、何かが輝いている。

金色の中に、ちらちらと動く、光のようなもの。

猫の目ナビだ。記録係にもらった、案内の目。

ナビが何かを捉えている？

七都は起き上がり、ナビをつかんだ。

金色の半球の中で、三つの色のついた影が漂っている。

これは、なに？

「拡大！」

七都は、ナビに命令した。

途端に、ナビの上に映像が現れる。

オレンジ色の影と、その後ろに、クリーム色の影が二つ。

オレンジ色の影は、手前に移動している。真っ直ぐに。

「えーと。こういうの、映画で見たような。何かのゲームをした時も、コックピットにこういうの、付いてた。何て言ったっけ。……レーダー探知機？」

七都は呟いた。

そうだよな、きっとそうだ。

このナビには、そういう機能もあるんだ。

でも。となると？

このオレンジ色の影は、こちらに近づいてきてるってこと？
今？ まさに？

もしかして、ものすごく近い？

窓のガラスが、軽く音をたてる。

誰かがガラスをたたいたのだ。

七都は、びっくりした猫のように飛び上がる。

ガラスの向こうに、背の高い人影があった。

ネイビーブルーの目が、きらりと光る。

（ジュネス！？）

七都は、ナビとジュネスを見比べる。

ナビの中のオレンジは、動くのをやめていた。

では、ナビのオレンジ色は、彼だったらしい。

となると、背後の二つのクリーム色は、グリアモスということになる。

バルコニーの下あたりで、機械の馬に跨り、ジュネスを待っているのだろう。

七都は、窓を開けた。

太陽よけのフード付きマントで体を覆ったジュネスが、そこに立っていた。

「ジュネス？ どうしたんですか？」

「お別れのご挨拶に……」

彼は、静かな眼差しで、同族の少女を見下ろした。
だが、そこに何かを見つけて、ジュネスの目の中に、驚きが広がる。

彼は、指をそっと七都の額に近づけたが、触れずにそのまま静止させた。

銀の輪はずして寝ていたので、七都の額はあらわになっている。
ジュネスには、シルヴェリスとリュシフィンの、口づけのあとが見えているのだ。

「私は、これから魔の領域に帰ります」

ジュネスが、七都を眩しそうに見つめながら、言った。

「逃げたアヌヴィムも、見つけて始末しましたのね」

始末したって……？

シャルディン？

ジュネスに見つかって、殺されたってこと？

七都は、ぎゅっと手を握りしめる。

「ナナト。一緒に来ませんか？」

ジュネスが言った。

「それは……」

七都は、口ごもる。

「行き先は違うが、同じ魔の領域の中です。風の都までお送りしますよ。その前に、あなたの怪我も治療しなくてはね。光の魔王ジエルフォートさまのお城には、どのようなひどい怪我でも回復させられるという装置があるとか。それを使わせていただくことも出来ますよ」

楽だろうな、この人に同行させてもらったら。

七都は、一瞬、思った。

傷も治してくれるみたいだし。送ってくれるし。

でも、だめだ。

風の都には、自分の力で、一人で行かなければ。

それに、同族とはいえ、やっぱり知らない人について行ってはいけないし、第一この人は、シャルディンを始末したと言ってるんだもの。

「ジュネス。とてもありがたいんですけど……。わたしは一人で来

るように言われてるんです。だから、一人で、風の都まで参ります」

七都は、彼に言った。

「しかし、もうすぐ夜が明けますよ。今、ここには……」

「だいじょうぶです。わたしは、太陽は平気だから。昼間でも外を歩けるんです。人間と同じように」

ジュネスは、ますます驚いて、まじまじと七都を見つめる。

「あなたは、早く行ったほうがいいですよ、ジュネス。太陽、ためなんですよ。もう随分明るくなってきてるから」

「……そうですね。そうします」

ジュネスは、微笑む。

「いつか、いずれかの舞踏会などで、あなたとお会いすることになるのかもしれませんが。ナナト、お二人の魔王さまに愛されていらつしゃる姫君……。その時は、私と踊ってくださいますか？」

彼が訊ねた。

「えーと。わたし、踊れないんですけど……」

「では、その時までには、練習しておいて下さいね。約束ですよ。楽しみにしています」

「……あの、ジュネス」

会釈して、立ち去ろうとするジュネスに、七都は、ためらいながら声をかける。

ジュネスは振り向いた。

「あなたの逃げたアヌヴィムのことですけど……。殺したんですか？」

「殺す？ とんでもない。そんな野蛮なことはいけませんよ」

ジュネスは、肩をすくめた。

「でも、もうそんなに持たないでしょうね。魔法の鎧がなくなったら、ただの人間に戻るしかありません。もともと定められた寿命に従わなければならぬのです。彼の寿命は、既に尽きています。では」

三頭の機械の馬の音が、遠くなる。

七都はバルコニーに立って、魔の領域に消えて行く光の魔神族の一行を見送った。

月はまだ輝いているが、太陽の気配が強い。

白い靄が、風景の中のあらゆるものを隠すように、深く漂っている。

「シャルデイン。どこにいるの？」

七都は呟いたが、その声は、夜明けの風景の中に吸い込まれていくだけだった。

第6章

七都は、部屋に戻った。

再び猫の目ナビを手のひらに乗せて、覗き込む。

「アヌヴィムのスキャンって、出来る？」

七都は言ったが、ナビは無反応だった。

「このあたりにアヌヴィムはいないってこと？ そうか。シャルデイン、もうアヌヴィムじゃなくなってるんだよね……。じゃあ、人間のスキャンをお願い」

途端に、ナビの中いっぱいに、赤い点が現れる。

「多すぎ。つまり、この宿の全員ってことか」

七都は、ため息をつく。

「じゃあね。死にそうになっている人間のスキャン」

だが、ナビは反応しなかった。まるで、無言で抗議するように。

「ごもつとも。そういう細かいのは、範囲外か。それが、もう、死んじやってるの、シャルデイン？」

七都は、しばらくナビの中の赤い点を見つめていたが、それを拡大させてみる。点は、さまざまなポーズをした、人の赤い影になる。

「この赤い影が人間のエネルギーをスキャンしているのだとしたら、その強弱がわかるかも」

七都は、赤い点が固まっている地点を無視して、その外側を捜してみた。

すると、遠く離れたところで、一つだけ、青を中に抱え込んだ、ピンク色の影があった。横たわっている人間の形だ。

「見つけた！」

七都は、メーベルルのマントを羽織る。そして、バルコニーの手すりを飛び越え、難なく地面に降り立った。

ナビを頼りにしばらく進むと、野原が現れた。
靄が切れ、白い花が一面に咲いているのがわかってくる。
すっきりしたよい香りが、あたりに漂っていた。

（ああ、この花、知ってる）

七都は、思い出した。

メーベルルと七都を弔うためにユードが持ってきた花束……。その中であつたのと同じ花だ。

鈴蘭を大きくしたような、可憐で、かわいらしい白い花。柑橘系の香り。

人間の食べ物の匂いは苦手だけど、この花の香りは、好き……。

七都は、そつと花をひとつ引き寄せて、香りを嗅いでみる。
その香りは、確かに癒されるし、落ち着くような気がする。魔神

族にとつては、そういう感覚を抱ける花なのかもしれない。
もしかしてユードは、そのこともわかっていて、この花を選んだ
のだろうか。

白い花畑の中に、靄を薄くまとして、誰かが倒れていた。

「シャルディン？」

七都は、彼のそばに座る。

彼は、目を閉じたまま、動かなかった。

「シャルディン。生きてる？」

「まだ、生きてますよ……」

彼が答えた。

だが、その声は、七都が知っている彼のものではなかった。
しゃがれた、聞き取りにくい声。
変化しているのは、声だけではない。

七都は、彼を見下ろした。

そこに横たわる彼の髪は、漆黒ではなく、銀色がかつた白。

顔からは張りも艶も消え、深い皺が刻まれている。

顔だけではなく、首も、手も、老人のそれだった。

本当の年齢は六十代前半くらいなのだろうが、八十代、いや、それ以上にしか見えない。

彼は、目を開ける。

その目は、薔薇色だった。瞳は、深い葡萄色。

七都は、鮮やかな赤色をした、彼の目を覗き込む。

「なんか、随分様子が違っちゃったね」

「……これが、私の本当の姿です」

シャルディンが呟く。

「そんなに悪くはないよ。素敵なおじいさまだと思う。きれいな目だね。莓ジュースみたい。髪は、パールホワイトのアクリル絵の具みたいな色だ」

「あなたの、私の目と髪に対する例えは全く理解不能ですが、まあ、それなりの賛辞だと推測しておきましょう」

シャルディンが言った。

「ジュネスさまの趣味ではなかったので、魔法で髪の色も目の色も変えていました」

「わたしは、このほうがいいと思うよ。雰囲気あるもの。個性的だし。あなたにとっても似合ってる」

「それは、どうも」

シャルディンは、七都を真っ直ぐ見上げた。

「とうとう私の頭も、おかしくなってきたのでしょうか。もう朝だというのに、魔神族のあなたがここにいるなんて」

「わたしは、太陽の光に溶けたりしないの。朝になろうが、昼になろうが、外に出ていられるんだ」

「そうですか。驚きました」

「さつき、ジュネスが来たよ。夜明け前だというのに、わざわざ寄つてくれたみたい」

「あなたのことが気にかかったのでしょうね。そういう方ですから」

「一緒に来ないかって言われたけど、断っちゃった」

「一緒に行かれても、問題はなかったでしょうに。あの方は、魔神族にしておくにはもったいないくらいなの、いい方ですよ。女の子にもやさしいしね。育ちもいい。光の魔王さまのご親戚ですし」

「でも、あなたをこんなふうにしたのは、彼なんですよ」

「あの方からいただいた魔法の能力をお返ししただけ。それだけのことです。あの方は、悪くない」

「……ジュネスのこと、とても慕っていたんだね、シャルディン」

「いちばんともなご主人でしたからね」

シャルディンは、穏やかに微笑む。

「で、動けないの？ シャルディン。全然？」

「そのようです」

「家族のところに帰るんじゃないの？」

「もう、無理です。魔法がなくなっても、多少は動ける自信はあったのですが、魔法は思った以上に、私の体を蝕んでいました。間もなく私の命は尽きて、体は朽ち果てるでしょう。このピアノの花畑の中に」

「……ピアノっていうんだ、この花」

「これはね、結婚式のために、花嫁が持つ花です。花束の中にこの花を入れると、必ず幸せになれるという言い伝えのある花……。魔神族が好む花でもありますよ。私は、この花を摘んで、妹にあげる約束をしていました」

シャルディンが言った。

「じゃあ、その約束、果たさなきゃ」

「もう、摘む元気さえありません」

シャルディンは、目を閉じた。

透明な薔薇色が、皺の中に消えてしまう。

「シャルディン？　ねえ、シャルディン。また、言い合いっこしようよ」

「そんな気力もありませんよ……。ナナトさま、もう、構わないでください。あなたも、行かねばならぬところがおありのはず。行ってください。どうか……」

七都は、彼の手を取った。干からびた木の枝のようだった。体温も感じられない。

「シャルディン。わたし、あなたを助けられないのかな」

七都が呟くと、彼は目を開いた。

「では、ナナトさま。私をあなたのアヌヴィムにさせていただけますか？」

「それは……無理だ……」

答えに詰まった七都を見て、シャルディンは、微笑む。

「冗談ですよ。しかし、あなたも嘘をつけない方だ。心の動きがわかりやすく顔に出ますね。そんなに困ったような顔をされなくても」

「あなたも、冗談言う気力は、まだあるんじゃない」

「しかし、冗談にする必要もないですかね……。私も、まだ死にたくはないです。確かに、あなたはアヌヴィムを持つには少し若すぎるし、ご自分の魔力もまだ十分に使えていない。おまけにひどい怪我をされていて、エディシルが弱すぎる。だが、あなたが生来お持ちになっている魔力の強さに賭けてみるのも、いいかもしれせん」

「わたしは、アヌヴィムの魔女の人に言われたよ。素性がわからな
いし、魔力もちょうど使えないし、幼すぎるから、取り引き出来な
いって」

「その人は、正統派ですね。人間としても地位に恵まれていて、教養があつて、おそらく代々アヌヴィムで、仕えている魔神族も、かなり身分が高い人なのでしょう。だが、私は、そうじゃない。いろんな魔神族のもとを渡り歩いてきました。自分の意思ではなかったのですけどね。売られたり、賭けの道具にされたり……。エディシルも、与えられるのではなく、自分から取りに行くことを強要されました。ゆえに、あなたの素性も、魔力があまり使えないことも、幼いことも気にしません」

「だけど、あなたをアヌヴィムにするにしても、やり方がわからない」

「私が知っています。というか、私にエディシルをくださればいいだけです。あなたが出来ないのであれば、私のほうから、取りにいきましょう」

「エディシルを……？」

「わかっていますよ。怪我をされている今のあなたから、エディシルを取り上げることは、とても酷なことです。だから、無理にはいいません。ただ、私を助けてくださる気がありなら、それなりの覚悟をしていただかないといけませんので。……どうされますか？」

七都は、深く呼吸をする。

改めて考えなくても、たぶん答えは最初から決まっている。

今の彼を助けることが出来るのは、自分しかない。そして彼を助けるには、その方法しかないのだ。

それはよくわかっている。ならば、あとは、自分の気持ちに踏ん

切りをつけて、それをいつ行動に移すかどうかだけになる。

七都は、彼に言った。

「わかった。では、今からあなたを助ける。その気持ちは変わらない。あなたは、家族と会わなきゃいけないよ」

「では、ナナトさま。わたしに口づけを」

「……」

シャルディンは躊躇している七都を見上げて、微笑んだ。

「ほら、やはり顔に出る。また、困った顔をされた」

「だって……。やっぱり、こわいもの」

「では、手を。手なら、こわくないですか？」

シャルディンは七都の手を取り、自分の唇の上に乗せた。

「今度あなたがアヌヴィムを作るときは、ちゃんと口づけをしてあげてくださいね。これは、少し屈辱ですよ。手を使うなんて、魔王さまくらいなものです」

「ごめんなさい……」

「では、体から力を抜いて。楽な感じで、じっとしておいてくださいね」

シャルディンの唇に乗せた七都の手のひらが、次第に熱を帯びる。

七都は、目を閉じた。

体の中のすべての血の流れが、そこに向きを変えたような気がする。

そして、それは、ゆっくりと動き始める。

七都の腕に、手首に、そして、指の先に。そこからさらに、シャルディンの唇を通して、彼の中へ。

七都の体の奥底で、何か大切なものにひびが入ったような気がした。

それは、否応なく引きちぎられていく。

もぎ取られ、流れの中に溶け、体の外に出て行ってしまう。

身の毛がよだつような喪失感だった。

体の一部が流れ去っていく。

止めようとしても、止まらない。

恐ろしいほどの勢いで、消えて行く。

だめだ。今矢うには、あまりにも早い。

まだ、何にも用意が出来ていない。早すぎる。

「いやだ!」

七都は、思わず叫んだ。目を大きく見開く。

だが、何も見えなかった。赤黒い闇しかそこには存在していない。

(止めてはなりません、ナナトさま)

シャルディンの声が、頭の中に聞こえた。

（だいじょうぶですよ。これは、エディシルの流れ。魔神族にとつて、誰かにエディシルを与えるという行為は、そんなに不快なものではないはずです）

不快なものじゃない？

確かに、グリアモスにエディシルを食べられたとき、妙な快感みたいなものはあったけど……。

あれのこと？

だが、今は、そういうものは感じない。

何か、胸のあたりの刺激が、それを邪魔している。

これは、何なのだろう……。

胸のあたりに、刺すような刺激が絡みついていた。

何千本もの針でつつかれていたような、刺激。

それはエディシルの流れに触発されるように、次第に強くなってくる。

やがて、針ではなく、何千本もの剣で滅多打ちにされているような、恐ろしい感覚が胸に広がった。

グリアモスに引き裂かれた傷だ。それが、叫ぶように、うずいている。

痛い……。

痛い？

これは、痛み？

そんな。

魔神族は、痛みを感じないはずなのに……。

七都は、愕然とする。

だがそれは、痛みだった。

元の世界でしか感じるはずのない、痛み。

今まで感じなかった怪我の痛みが、一度にまとまって押し寄せてきたようだった。

何重にもなつて。何倍にもなつて。

胸の傷に、何か劇薬でも塗りこめられたようだ。

鈍い痛みと鋭い痛み。

いろんな痛みが合わさって、傷の中でのたうちまわっている。

何か痛みで出来上がったおぞましい生き物がそこに閉じ込められ、滅茶苦茶に暴れているようだった。

傷は再び引き裂かれ、暗黒の傷口は、果てしなく広がっていく。その感覚が確実にあった。リアルすぎるくらいに、感じられた。

七都は、痛みと恐怖に耐え切れず、悲鳴をあげる。

（やめて！　こんなの、我慢出来ない！！）

シャルデインは、彼の唇から手を引き剥がそうとする七都の腕を両手でつかんだ。

（ナナトさま！　どうか、ご辛抱を。共倒れになります！）

シャルデインが、七都の頭の中で叫んだ。

でも、痛い！

痛いよ！！

間違いなく傷が大きく広がっている。

そのうちそこから体が引き裂かれて、ばらばらになってしまっ……

……！！

分解して、暗黒の空間の中に吸い込まれてしまっ……！！！！

（そう思ったら、本当にそうなってしまいますよ！）

シャルデインの声が響く。

（あなたは、私を助けるとおっしゃった。どうか、その言葉に責任をお持ちになって、それを最後まで果たしてください。私を助けてください！！）

（……）

七都は、見えない目をカッと開いた。

耐えられそうもない痛みをそのままダイレクトに感じることを放棄し、シャルデインの唇に乗せている自分の手に意識を集中させようとする。

だが、それらはしつこく触手を伸ばし、その中に七都を取り込もうと襲ってきた。

もう少しだ、もう少し。

もう少しでも我慢したら、あとは、受け入れる。どっぴりとつかってやる。

だから、そこでおとなしく、止まっているのだ。そこから動くな。

七都の唇から、うめき声がもれる。自分でもぞっとするような声

だった。

シャルデインの顔に、血の気が戻っていく。
その枯れ枝のような指にも、腕にも、ふっくらと肉がついていった。

もはやそこにいるのは、死にかけた老人などではなく、生氣に満ちた美しい青年だった。

シャルデインは、七都の手をゆっくりと唇からはなした。
エディシルの流れが停止する。

途端に、抑えていた痛みが、容赦なく、そして待ち構えていたように、七都を飲み込む。

七都は、気を失って、彼の隣に倒れこんだ。

シャルデインは、起き上がった。

白銀の髪が揺らめいて輝き、鮮やかな薔薇色の目があたりを見回す。

そして、彼は、ピアノの花に囲まれて、目を見開いたまま静かに横たわっている、魔神族の少女を見下ろした。

白い陶器のような肌。薄紅の花びらのような唇。

太陽の光を通すと、緑がかった黒髪は深い緑色に、透明な赤紫の目は、暗い赤色に見える。

多くの魔神族と関わってきた彼も、太陽の光の下で魔神族を見るのは、初めてだった。

彼は七都を抱え上げ、金色の朝の光に照らされた白い花畑の中を、

しっかりとした若者の足取りで歩き始めた。

第7章

誰かが、そつと頬をなでる。
やさしく、いとおしげに。

ああ。ここは、どこだろう。

そうだ。グリアモスに襲われて、カディナに背負われて……。
カディナが、ゼフィーアとセレウス姉弟の館に連れてきてくれたんだ。

頬に触れていく、熱すぎる体温。

じゃあ、これは。

この体温は……。

「セレウス？」

七都は、目を開けた。

シャルディンが、そこにいた。

蔓ジュースのような、きれいな目が七都をみつめている。

彼の輝くパールホワイトの髪の後には、明るい昼間の空を切り取った窓があった。

「残念ながら、私はセレウスさんではありませんよ」

彼が、穏やかに微笑む。

そうか。あれから、随分いろいろあったんだ。

わたしがいるのは、あの町の、あの館じゃない。

七都は、徐々に、現在の状況を把握する。

「シャルディン？」

七都は手をのばして、シャルディンの顔に触ってみた。

「シャルディン。若くなってる……」

「あなたのおかげです」

シャルディンは、頭を下げた。

「魔法使いに戻れたの？ わたしのエディシルで？」

「はい。でも、あなたのお怪我は、ひどくなってしまいましたね」

「怪我が……？」

「まだ痛みますか？」

「痛みは全然ないけど……」

「それはよかったです。正直、あせりました。魔神族が痛いなどと泣き叫ぶなんて。きっと、無理をしてはならないという、あなたご自身のお体からの警告なのでしょうね」

そこで七都は、ベッドに寝かされていることに気づいた。

あの宿の、七都の部屋の中だ。
胸に、新しい布が巻かれている。

「んん？
え？」

げ。
裸だ。

えーっ！！！！！！！！！！！！！！

えーっ！
えーっ！！
えーっつつつ！！！！！！

「どうかされましたか？」

シャルディンが、心配そうに訊ねる。

「み、見たの、胸の傷。そ、それに……」

「そりゃあ、見ますよ。あなたは私のご主人ですからね」

シャルデインが真面目な顔をして、言う。

「おいたわしいです。恐ろしい傷あとだ」

「な、なんでわたしは、服着てないわけ？」

「ああ。先ほど、体を拭いてさしあげましたので」

⌈
:
:
:
:
!
!
⌋

ということは、隅々まで見られてゐることだよ……。

七都は、思わず毛布を目の下あたりまで引つ張りあげた。

「何か、お困りなことでも？」

シャルディンが、不思議そうに言う。

落ち着け。

彼は、アヌヴィム。

そう、わたしのアヌヴィムなんだから。

わたしの世話をしてくれてる。

要するに、看護師さんと同じ。

あせることも、恥ずかしがることもない。
でも。

七都は、ため息をついた。

ゼフィアは、同性だったから、なんとか我慢もできて、そのうち恥ずかしさもなくなった。だが、彼は異性だ。抵抗がありすぎる。体を拭かれたのは、眠っていたから仕方がないとしても、もし起きているときにそんなことを提案されたら、絶対に、いやだ。どんなに気を悪くされても、拒否するしかない。

こんなことでいちいち恥ずかしがっていたら、この先、相当困ることになる――。

あの時のゼフィアの言葉は、こういうことも意味していたのか。
七都は、何度もため息をつく。

「あなたのご主人の中には、当然女性もいたわけよね？」

七都は、シャルディンに訊ねてみる。

「はい。いましたよ。でも、私は、彼女たちには、あまり好かれていなかったようです。最初は皆様、おやさしいのですが、そのうち憎まれて、結局、強制的に、別の主人のところに行かされることに」

「でも、その人たちの世話をしていたんだよね」

「はい。それが何か？」

「ううん、べつに」

やっぱり、彼にとっては、普通のことなのだ。

アヌヴィムとして、女主人の世話をすることは、ごく当たり前のこと。

恥ずかしがることはないのかもしれない。

ゼフィーアのとくと一緒にいるだけだ。

だけだ。

シャルディン、わたしを見て、本当に何とも思わなかったのかな。ゼフィーアみたいに、ただ淡々と拭いてくれただけ？

優秀な看護師さんとして？

「わたし、どれくらい眠ってた？」

七都は、彼に訊ねた。

「三日ぐらいですね」

「三日？　一泊だけの予定だったのに……」

「仕方ありませんよ。怪我をしている上に、たくさんのエディシ
ルを失ったのですから。しっかりお眠りにならないといけません。
蝶は、ひっきりなしに、窓から飛んできました。群れになって。で
も、その度に、群れごとなくなってしまうましたけどね」

「つまり、わたしが食べちゃったわけね」

「そうですね。あなたに触れることもなく、この部屋に入った途端、
片っ端から消えました。なんというか、豪快で、驚愕するような、
でも、幻想的な光景でした」

「そう……」

眠ったまま無意識で、蝶を群れごと、か。
我ながら、ぞつとする。

「でも、三日つて。シャルディン、あなたを三日も足止めしてしま
った。あなたは、家族のところに、すぐに帰らないといけない」

「いえ。私は、あなたのアヌヴィムの魔法使いです、ナナトさま。
あなたからいただいた魔法の力がこの体の中にある限り、あなたに
忠誠を……」

シャルディンは、ベッドの横にひざまずき、手を胸に置いて、丁
寧に頭を下げる。

「あなたが風の都に行かれるなら、私はあなたに付き従い、あなた
を守りましょう」

ああ。

それはきつと、セレウスがわたしに言いたかった言葉だ。

七都は、シャルディンとは対照的な、緑色をしたセレウスの目を思い浮かべた。

「あなたを風の都に無事に送り届けたら、そのあと、私は家族のもとに帰ります」

「それじゃ、遅すぎるよ、シャルディン」

七都は、彼の肩に手を置いた。

「この三日の間だって、あなたの家族の誰かに、何かあったかもしれない。風の都なんて、いつたどりつけるかわかったもんじゃないよ。今すぐに帰って。わたしのことなんか構わずに」

「しかし……。私があなたのアヌヴィムである以上、私には、あなたを守る義務があります」

「わたしに関しては、そんな義務なんかないよ。あなたは自由だ。どこにでも、あなたが行きたいところに行っていい。そしてそのまゝ、わたしのところになんか戻って来なくてもいいから」

「ですが……」

「だってあなたは、ジュネスをほっぴらかして、逃げたわけじゃない。家族のところに帰るためとはいえ」

「ジュネスさまには、たくさんアヌヴィムがいます。でも、あなた

には、私しかないでしょう?」

「だいじょうぶだつてば。それにね。アヌヴィムの魔法使いがわたしに同行したがつたのを、わたしは断ってしまったの。だから、わたしは、同じアヌヴィムの魔法使いであるあなたを連れて行けない。彼に対する裏切りになってしまう」

「それは、セレウスとかいう方ですか? さっき、あなたが呼びかけられた……」

シャルディンが訊ねる。七都は、頷いた。

「その方は、あなたのアヌヴィム?」

「ううん。彼に魔法の能力をあげたのは、わたしのお母さんみたい」

「あなたの母上が……」

「でも、随分前のことだから、セレウスの魔法の能力は、もうすぐなくなってしまうらしいけど」

「あなたの母上は、風の都に?」

「行方不明。でも、魔の領域のどこかにいるのかもしれない」

「母上がそういう状態ならば、ではあなたは、そのセレウスさんをあなたのアヌヴィムにしてあげるべきなのでは?」

シャルディンが言った。

「わたしのアヌヴィムに？」

セレウスに、面と向かってそんなことを言われたことはなかったが、当然、彼はそう思っているに違いなかった。

もし彼が、自分がもうすぐ魔法使いでなくなることを知っているとするならば、なおさらのこと……。

「そうだね。わたしが風の都に到着して、素性がわかって、もっと魔力が使えるようになったら、考えなければならぬのかもしれないかもしれない……」

でも。

七都は、ふと思う。

セレウスに、主人として、こまごまと世話をされるのは、いやかも……。

だって、彼がわたしに恋愛感情を持っているらしいってこと、わかってしまっているんだもの。

七都は、セレウスがにっこり微笑みながら、「さ、お体をお拭きしましょう」なんて言っているシーンを想像して、頭を抱えたくなくなる。

「彼のお姉さんは、彼は、ただの人間に戻ったほうが幸せなんじゃないかって言ってたけどね」

「それを決めるのは、セレウスさん自身ですからね。セレウスさんがあなたのアヌヴィムになったら、私は、当然仲良くさせていただきますよ」

シャルディンが言った。

「とにかくね。あなたは、すぐに帰ったほうがいいよ。わたしは、今までもひとりだったし、これからもうひとりで行く。心配しないで」
「しかし、そのお体で？　今まで旅を続けて来られたのさえ、不思議なくらいですよ。しかも、今回のことで、前より傷が深くなっています」

「まあ、なんとかなるよ」

「その、なんとかなるという確証は、どこから来ているのですか？」

「なんとなく……」

「なんとなく？　信じがたいです」

「……」

このままでは、また言い合いっこになっちゃう……。

七都は、彼の薔薇色の目を真っ直ぐ見つめる。そして、彼に言った。出来るだけ威厳をこめた、きつめの口調で。

「シャルディン。これはわたしの命令です。帰りなさい。主人の命令には、おとなしく従いなさい」

シャルディンは、しばらく黙って、七都を見つめ返した。

「……わかりました」

やがて彼が、あきらめたように呟く。

「では、私が家族のところへ帰って一段落したら、風の都にあなたをお訪ねしてもよろしいですか？　そこにおられるのでしょうか？」

「わたしの家は、別の世界にあるの。たとえ風の城に行っても、たぶん、そこには住まない。しばらくしたら、自分の家に帰るつもりだから、わたしを訪ねてきても、わたしはいないと思う」

「風の城ですか……」

シャルディンは、じつと七都を見つめる。

「あなたは、リュシフィンさまの姫君？　私は、とんでもない方のアヌヴィムになってしまったのかもしれないね」

「わたしがリュシフィンの何なのかは、わからない。たぶん、親戚じゃないのかな、ジュネスと光の魔王さまみたいに」

「でも、あなたがおられなくても、いつか訪ねますよ。風の城に行くには、勇気がいりますけどね。しかし、私が行って、果たして入れてくれるのでしょうか」

「もしわたしがその姫君なら、あなたのことは伝えておくから」

「お願いしますね」

シャルディンが、微笑んだ。

「では、ナナトさま。」ご無事で」

「うん」

七都は、シャルディンを見下ろした。

彼にいとおしさを感じる。

それはもちろん、恋愛感情などではなくて、たとえば、ソファの上で、安心してきつて平和に眠っているナチグロ、ロビンを眺めたときに感じるような、そんな、くすぐったいような、なごめるような感情。

彼が、七都の力の一部をその中に持っているからなのかもしれない。

魔神族は、自分のアヌヴィムに対して、こういう感情を抱くものなのだろうか。

七都は、シャルディンの首に手を伸ばし、彼の頭を抱いて、引き寄せた。

そして、彼の唇に、そつとキスをする。

ついはむような、軽いキス。

人間に対するあの衝動を感じる間もない、短いキスだった。

「あなたに口づけをせずに、アヌヴィムにしてしまったから。せめてものお詫びというか、埋め合わせです」

シャルディンは、黙って七都を見つめた。

彼は、真っ直ぐに七都の目を覗き込んでくる。

その赤色の目の中には、魔神族に対する恐怖など、微塵もない。

さまざまなことを経験し、知ってきた、穏やかで静かな目。

けれども彼は、次の瞬間、にやっと笑った。そして、七都に言う。
「いけませんね、ナナトさま。そういう格好で、こういうことをしては」

「え？」

「たいていの男なら、そそられますよ。襲ってしまうかも」

七都は、腰のあたりまで落ちてしまっていた毛布を、素早く引き上げる。

シャルデインは、くすつと笑った。

また、おちよくられてる！

七都は、彼を睨む。

「シャルデイン。まさかとは思うけど。わたしが眠っている間に、なんにもしなかったよね？」

「は？ するわけないでしょう。あなたはわたしのご主人で、おまけに怪我人ですよ」

シャルデインが、真面目な顔をする。だが彼は、すぐに表情を崩して、微笑んだ。

「ただ、たつぷりと鑑賞はさせていただきましたけれどもね」

「か、鑑賞！？」

「あなたの体は、非常に美しい。私は今まで数多くの魔神族の貴婦人やら少女やらを見てきましたが、群を抜いています。久しぶりの目の保養でしたね」

「……殴る！！！」

シャルディンは笑いながら、七都が振り下ろした手をつかんだ。

「そんなことばかり言ってからかってたから、女主人たちから嫌われたんでしょう！？」

「おそらく」

「女性にはやさしくしないと……」

シャルディンは、いきなり七都を抱きしめた。

七都の肩に両手を回し、髪をそつとなでる。

「あのね、アヌヴィムのほうから、主人に対して、そういうことしちゃいけないんだよ」

「知っていますよ。でも、私は気にしませんから」

「少しは、気にしようよ」

シャルディンは、七都の耳のそばに口を寄せ、薔薇色の目を半分閉じた。

「どうか、ナナトさま。あなたには、アヌヴィムの魔法使いがいる

ということをお忘れなくください。そして、いつでも、私を呼んでください。あなたが危険なときでも、つらいときでも、何となく寂しいときでも。私は、どこにしよう、あなたのもとに、すぐに参ります」

「……ありがとう。わたしの魔法使いさん。とても心強いです」

「では、私は行きます」

「気をつけて……」

シャルディンは、七都から離れて、立ち上がった。

「シャルディン。最後に約束して。女の子をおちよくらない。やさしくするって」

「わかりました。そうします」

彼は返事をしたが、その口元には、相変わらずのにやにやが、くつついている。

「全然、そういうなんて思っていないでしょ」

「そんなことないですよ」

笑いを噛み殺しながら、彼が言う。

「シャルディン――！」

彼は、七都に向かって、とても優雅に、そして、この上もなく深

く、お辞儀をした。

お辞儀をしたポーズのまま、彼の姿が、ばやける。

やがて、パールホワイトの髪も、莓ジュース色の目も、七都の前から、完全に消えてしまった。

空気に溶けてしまったかのようにだった。

「行っちゃった……。瞬間移動……。テレポーションっての？
わたしもああいうの、出来るようになるかなあ」

七都は、ベッドに横たわる。

もう少し眠って、それから目が覚めたら、わたしも出発しよう。
魔の領域へ。

三日も遅れてしまったもの。急がなきゃ。

セレウス……。

わたしがアヌヴィムの魔法使いを作ったことを知ったら、気を悪くするかな。

すぐに、暗く落ち込んだじゃうからな、彼は。

でも、シャルディンとセレウスって、あまり性格合いそうじゃないよね。

セレウスがシャルディン、苦手かも。

案外、ものすごく気が合って、無二の親友になっちゃったりするのかもしれないけど。

七都は、目を閉じた。

けだるい、だが、心地よい眠りが、すぐに全身を包み込んだ。

第8章

ピアノの、涼やかなよい香りが漂う。

空は澄みきって、白い羽根のような雲が、幾つも浮かんでいた。

穏やかな、晴れた日の午後。

シャルディンは、抱えきれないくらいのピアノの花を摘み終わり、それを持って丘を下る。

もう少し歩くと、家が見えてくるはずだ。

懐かしい我が家。まだあるのだろうか。

そして家族は、今でもそこに住んでいるのだろうか。

あの時。

ここで、時間は止まってしまった。

黄色い猫の目の魔神族に出会ってしまった、この場所で。

シャルディンは、ふと立ち止まって、あたりを見渡す。

今、彼らの姿はない。遠い遠い時間の果てに、過ぎ去ってしまった。

もう、誰も邪魔をするものはいない。

だから、続きを始めよう。もう遅いのかもしれないけれど。

背の高い草の間から、一人の少女が飛び出してきた。

シャルディンは、少女とぶつかりそうになる。

金色のやわらかい長い髪を、少女はおさげにしていた。薄い空色の目が、驚いてシャルディンを見上げる。

「リュディ!?」

シャルディンは思わず呟いたが、思い直した。

そんなはずはない。

あれから五十年以上たっているのだ。

この少女がリュディであるはずがない。

だが、彼女に……妹に生き写しだ。

「シャルディン?」

少女が、首をかしげて彼に訊ねる。

シャルディンは、ただ黙って、彼女を見つめた。

私の名前を知っている……?

「あなた、シャルディンね?」

少女が、にっこりと笑った。

「きみは、リュディ? いや、そんなことがあるわけがない。だが、もしきみがリュディなら……」

「あなたがその花を渡さなきゃならないのは、私じゃないよ」

リュディに似た少女は、シャルディンの手を取った。小さな手が、しっかりと彼の手を握りしめる。

「行きましょう、シャルディン。こつちよ。おうちまでの道、覚えてる?」

「覚えてるよ……。きみは誰?」

「私は、マーシイ。シャルディン、本当に赤い目と銀の髪をしているのね。おばあさまの言うとおりだった。それに、とてもきれい」

「きみは……リュディの孫?」

「そうよ。私、おばあさまの子供の頃にそっくりだって言われるの」

マーシイはシャルディンの手を引いて、草の間の細い小道を進む。

やがて草が切れ、こじんまりとした館が現れた。

シャルディンが生まれ、少年の頃まで育った、懐かしい家。

時間の見えない積み重ねが館をくすませ、息の詰まるような重厚さが、彼の記憶よりもはるかに増していた。

けれども、館は十分に手入れされ、そこに住む人々の、日々の息遣いが感じられるような、あたたかい雰囲気全体に満ちていた。

シャルディンは、マーシイと手をつないだまま、しばしそこに佇んだ。

テラスに、誰かがいる。

椅子に腰掛け、うとうとと眠っている、一人の老婦人。

白くなったとはいえ、まだ豊かな量の髪。それを一本の三つ編みにして、背中に垂らしている。

肌は、老いてくすんではいるものの、健康的な艶があった。

顔には、悲しみやつらさに耐えた分だけの皺が刻まれてはいたが、彼女は、穏やかな表情をしていた。

「おばあさまだわ」

マーシイが言った。

シャルディンは、椅子で眠るリュディの前に立つ。
そして、やさしい目で彼女を見つめた。

リュディ……。

きみは、ずっと自分を責めていたのだろうね。
私が魔神族に連れて行かれたのは、自分のせいだと。
自分がピアノをせがんだせいだと。

涙を枯らすことなく、いつも私の姿を探して、ピアノの花畑を見
つめていたのだろうね。

少女の時期を過ぎて、娘になって、母になって、年老いても。
あの時から、ずっと、ずうっと……。
きみの時間も、止まったままなんだ。

リュディは、目を開けた。

少女のときと全く同じ、薄い空色の目が、シャルディンを見上げ
る。

「シャルディン？」

シャルディンは微笑んで、リュディにピアノの花束を差し出した。

「リュディ。随分待たせてしまったけど。はい、約束のピアノの花だよ」

「シャルディン、遅い！ どれだけ待たせたら気が済むの？ ピアナの花なんて、もうどうでもよかったのに」

リュディは、シャルディンにしがみつく。

「ああ、これは、夢なのかしら。本当に……本当にシャルディンなの？」

シャルディンは、リュディを抱きしめた。

「夢じゃないよ、リュディ。ぼくは帰ってきたんだ」

「シャルディン。みんな、あなたを待っていたのよ。ずっと待っていたの……」

「わかってるよ……。ごめんね」

リュディは、顔をくしゃくしゃにした。少女の頃の彼女が、そこにいた。

「わたし……わたし、もうピアノの花は、見るのもいやになったの。あれから摘んだことはなかったわ。自分の結婚式のときだって、持たなかったの」

「うん。きみのことだから、そうなっちゃったんじゃないかって、ずっと思ってたよ。本当にごめんね。これからは、好きなだけピアノの花を摘んであげるよ。ほら、きみの青い目に、よく映える」

シャルディンは、ピアノの花をリュディの三つ編みの髪に挿した。
リュディの目から、ぼろぼろと涙がこぼれる。

彼女は、子供の頃によくそうしたように、両手で目を無理やりこすった。

「リュディ……。父さまと母さまは？ それから、兄さまは？」

シャルディンは、少しためらいながら、妹に訊ねた。

「母さまは、元気。兄さまも。父さまは、もう長くないの。でも、よかった。間に合ったわ。会ってあげて」

リュディは、涙を拭いながら立ち上がる。
そして、マーシイに声をかけた。

「マーシイ。大おじさまをすぐに呼んできて。弟が帰って来たって」

「うん。大おじさま、飛んで来るわ、きっと」

マーシイは笑って、駆け出した。

リュディは、シャルディンを抱きかかえるようにして、寄り添った。

一瞬でも離すと、たちまち彼が消えてしまうのではないかと心配しているように。

シャルディンは、ピアノの花を抱えたリュディと並んで、家に入る。

五十年前、帰れなかった自分の家の中へ。

「シャルディン？」

「シャルディンなの？」

部屋の中から、懐かしい、けれども、彼が覚えているよりもはるかに年老いた声が聞こえた。

そして彼は扉を開け、彼の父と母が彼を抱きしめるために、大きく手を広げて待つその部屋の中へ、足を踏み入れる――。

第9章

七都は、ぼんやりとした意識の中で、その光景を眺めていた。

シャルディンが、少し落ち着いてから、改めて七都に送ってきてくれた映像なのか、リアルタイムで起こっていることを、彼を通して七都が見ているのかは、わからなかった。だが、彼が家族と会えたことは、確かなようだ。

よかったね、シャルディン。間に合ったね。これからずっと、家族のそばにいるんだよ。今までいられなかった分、ずっとね……。

七都は、目を開けた。

見知らぬ人々の顔が輪になって並んでいるのが、フードの間から見えた。

全員、七都を見下ろしている。

七都は、飛び起きた。

「なんだ、生きてるじゃないか」

「行き倒れじゃなかったのか？」

「誰だ、女の子が殺されてるなんて言ったやつは」

人々が、驚き、あきれて口々に言う。

「な、なんなんですかっ？」

七都は、あたりを見回した。

さつき、たまたま見つけて寝転んだ、ピアノの花畑。

誰もいなかったはずなのに、旅人とおぼしき十数人の人々が、七都を囲んでいた。

「お嬢さん、ここで何をしてたの？」

中の一人が、七都に訊ねる。

「何って。うたた寝というか……言わば、すっかり昼寝……ですけど？」

七都が答えると、人々は、そろって合唱するように、ため息をついた。

「あのねえ、アヌヴィムの魔女さん。いくら昼間だからといって、人間にも悪いやつはたくさんいるんだよ」

「そうだよ。こんなところに寝ていたら、危ないったらありやしない」

「もつと気をつけなくちゃ」

「ご、ごめんなさい。心配をおかけしました」

七都はあせって、人々に頭を下げる。

旅の人々は、「まったく」とか「人騒がせな」とかいう言葉を口にしながら、そろそろとピアノの花畑から街道に向かって、移動し始める。

あっという間に、人々の群れは、消えてしまった。
そこに寝転んだときと同じように、風景の中にあるのは、空とピ

アナの花畑だけになる。

「ここなら、道からかなりはずれてるし、目立たない所だから、誰も来ないと思ったのに。甘かったな。何で昼寝しただけで、見知らぬ旅人たちに、あやまらなきゃなんないんだか。心配してくれたのはわかるけど」

七都は、立ち上がる。

「やっぱり寝るときは、きちんと宿を探して、泊まったほうがいいってことか」

七都は、腕を伸ばして、伸びをした。

少し眠ったので、気分がいい。

また当分、歩けそうだ。

七都は、ピアノの花を何本か摘んで、空になったカトウースの容器の中に差し込んだ。

今夜は、この花をベッドの枕元に置いて寝よう。そう決める。

そういえば、ユードは、当然この花のことを知ってて、この花をメーベルルとわたしに持ってきたのよね？

これは、結婚式のときに、花嫁が持つ花。

花束の中に入れると、幸せになれるという伝説のある花。

未婚のまま死んでいく、魔神族の二人の女性のために、あなたはこの花を摘んだんだね。

せつなすぎるよ、ユード。

七都は、摘み取ったピアノの花の匂いをかいだ。

心が落ち着くような、でも、どこかきりつと引き締まるような、不思議な香り。

シャルディン。

また、いつか会えるかな。

取りあえず、わたしのファーストキスは、シャルディンってことにしておこう。

自分から望んで、彼にキスをしたという点においても。

シャルディンが相手なら、不満も不足もないかもしれない。

彼、素敵だものね。美しさにおいては、ナイジェルにだってひけを取らない。性格はともかく。

「でも、やっぱり、残念ながら、恋愛感情はないんだよねー」

七都は、ためいき混じりに呟き、再び歩き始める。

「ところで、わたし、舞踏会のダンスの練習、しなきゃいけないのかなあ」

七都が立ち去ったあと、誰もいなくなったピアノの白い花畑の間に、風がやさしく吹き渡った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3712m/>

紅目の魔法使い <ダーク七都3・赤い眼のアヌヴィム>

2011年11月15日07時43分発行